

第26回

宮崎整形外科懇話会

プログラム

日 時 平成5年 6月26日(土)
14:00開会

会 場 宮崎観光ホテル(小戸の間)
(宮崎市松山1-1-1-1 TEL.0985-27-1212)

事務局 宮崎医科大学整形外科学教室内
〒889-16
宮崎郡清武町大字木原 5200
TEL 0985-85-1510(代)内線2220
0985-85-0986(直通)
FAX 0985-84-2931

—— 参加者へのお知らせ ——

1. 参加費；会場受付で申し受けます。 1000円（受付13:30 より）
2. 年会費；未納の方は受付で納入お願いします。 5000円

—— 演者へのお知らせ ——

1. 口演時間；1題6分、討論3分程度とします。
2. 口演用スライド；単写とします。演者は講演30分前までにスライドをスライド受付に御提出下さい。

—— 世話人会のお知らせ ——

13:00 ～ 13:40 橘の間

—— 特別講演のお知らせ ——

16:00 ～ 17:00 小戸の間

『変形性股関節症の治療』

N T T九州病院整形外科

伊 勢 紘 平 部長

註 上記講演は日本整形外科学会教育研修会（1単位）に認定されておりますので、御参加下さい。
尚、受講料 1000円を申し受けます。

14:00 開 会

一般演題 I. 座長 小林 邦雄

1. 捻れによる後骨間神経麻痺を呈した一例

宮崎医科大学整形外科 本部 浩一

2. 色素性絨毛結節性滑膜炎 (pigmented villonodular synovitis) の 2 例

宮崎医科大学整形外科 坂本 武郎

3. 右大腿軟部に発生した Mesenchymal chondrosarcoma の 1 例

県立宮崎病院整形外科 増田 吉彦

4. 足根管症候群の手術例について

獅子目整形外科病院 獅子目賢一郎

5. 脛骨粗面裂離骨折の 2 例

県立延岡病院整形外科 松岡 知己

6. Bipolar 型人工骨頭置換術後に生じた大腿骨骨折の治療経験

県立延岡病院整形外科 木屋 博昭

15:00 一般演題Ⅱ. 座長 横山 正昭

1. 考案した枕を頸椎疾患に使用した小経験

平部整形外科医院 平部 久彬

2. 第3、4胸椎脱臼骨折後、脊髓損傷をまぬがれた一症例

宮崎医科大学整形外科 渡邊 信二

3. 当科における経皮的椎間板摘出術の検討

宮崎医科大学整形外科 矢野 浩明

4. RAにおける椎間板のMRI

宮崎医科大学整形外科 吉田好志郎

5. DXAを用いたRAの骨粗鬆症の検討

宮崎医科大学整形外科 渡部 正一

6. 破壊性脊椎関節症のX線所見

永吉整形外科医院 岩切 清文

16:00 特別講演 座長 田島 直也

『変形性股関節症の治療』

N T T九州病院整形外科
伊 勢 紘 平 部長

17:00 閉 会

開 会 (14:00)

一般演題 I. (14:00~15:00) 座長 小林 邦 雄

1. 捻れによる後骨間神経麻痺を呈した一例

宮崎医科大学整形外科

○本部 浩一 田島 直也
平川 俊一 帖佐 悦男
松元 征徳
戸田 勝

社会保険江南病院

後骨間神経麻痺は運動麻痺を主徴とし、種々の原因によって生じるが非外傷性のものは稀であり、また診断に苦慮することが多い。

今回我々は、症例は、捻れによる後骨間神経麻痺を呈した一例を経験したので報告する。

【症例】19歳、女性。初診時左前腕外側部の圧痛及び左手の運動麻痺を認めた。MP関節にて手指の伸展は不可能であったが知覚障害は見られなかった。

電気生理学的検査にて後骨間神経麻痺が認められ、手術を施行した。結果、Frohse's archadeのやや中枢よりの部位に後骨間神経麻痺の捻れを認めた。捻れのある部位を含め約 2cm切除し再縫合を行った。

本症例の原因は不明であるが、橈骨頭、回外筋、神経との解剖学的位置関係及び、前腕の回外、回内運動が関与している可能性が考えられる

2. 色素性絨毛結節性滑膜炎 (pigmented villonodular synovitis) の 2例

宮崎医科大学整形外科

○坂本 武郎 田島 直也
桑原 茂 平川 俊一
帖佐 悦男 谷口 博信

色素性絨毛結節性滑膜炎 (pigmented villonodular synovitis; 以下、PVSと略す) は、局所再発が多く、治療に難渋することが少なくない。今回、MRIおよび関節鏡検査により膝窩部病変が明かとなり、前後両方より滑膜切除を施行した PVSの 2例を経験したので文献的考察を加え報告する【症例 1】22歳男性、平成 3年暮れより右膝の運動時痛、腫脹を自覚。平成 5年 1月鏡視下生検により PVSと診断。4月前方滑膜切除術、5月後方滑膜切除術施行した。

【症例 2】45歳女性、昭和60年左下肢に違和感、脱力感を自覚。近医にて Baker嚢胞の診断にて治療を受けていたが平成 4年11月当科にて膝窩部嚢胞摘出術施行、PVSの診断を得た。平成 5年 5月関節鏡、6月膝滑膜切除術施行した。

3. 右大腿軟部に発生したMesenchymal chondrosarcomaの1例

県立宮崎病院整形外科

○増田 吉彦 小林 邦雄
徳久 俊雄 高妻 雅和
阿久根 広宣 佐本 信彦
西井 章裕 大崎 泰
安田 幸一郎
林 透

県立宮崎病院臨床検査科病理

今回我々は大腿軟部に発生した極めて稀な間葉性軟骨肉腫Mesenchymal chondrosarcoma（以下 MCSと略す）の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

【症例】52歳、女性。【主訴】右大腿部の腫脹、だるさ。

【病歴及び経過】平成1年頃より誘因なく右下肢のだるさを自覚し、それが増強するために平成3年11月近医受診。右大腿部の腫瘤を指摘され紹介にて、11月11日当科初診。外観及びCTにて腫瘤は右大腿内側に存在し

8×6cm大、周囲組織との境界は明瞭であり癒着もなく可動性を有していた。腫瘤摘出を勧められたがその後の来院はなかった。その後徐々に腫瘤の増大、右下肢のしびれを自覚するようになり、平成4年8月21日当科再診。9月22日腫瘤摘出術を施行した。切除標本よりMCSと診断され、また胸写上肺転移も疑われ他院へ転院し腫瘍を含めた右肺部分切除を施行した。現在、右側胸部にも転移と思われる腫瘤を形成しており、また、原発部には腫瘍の再発が見られ、疼痛管理のみ行っている。

【考察】本症例では初診時、外観やCTにおいて周囲組織との癒着もなく可動性を有していたためbenignの可能性が高いと判断したが、軟部腫瘤が5cm以上あり、その中に不規則な斑状ないし点状の石灰沈着像を認める場合、悪性腫瘍を念頭におき対処するべきであることを痛感させられた。

4. 足根管症候群の手術例について

獅子目整形外科病院
県立宮崎病院整形外科

○獅子目賢一郎
高妻 雅和

足根管症候群は脛骨神経の足根管部での entrapment neuropathy であり最近では報告例もふえてきた。しかしよく調べてみると、手術例を多く報告しているのは、足の外科や末梢神経麻痺を専門としている医療機関にかたよっている。一般には第一線の医療機関では手術例は多くはないと考えられる。

当院で1987年より1992年までの6年間に手術を施行した足根管症候群は6例である。男性2例、女性4例ですべて片側例であり、手術時年齢は16才より57才と巾が広い。

他医で確定診断されなかった例や、当院でも手術にふみきるのに迷った例もあり、診断上の問題について文献的考察を加えて報告する。

また、手術の実際上の問題点、後療法や予後についても検討したので併せて報告する。

5. 脛骨粗面裂離骨折の2例

県立延岡病院整形外科

○松岡 知己 永田 高見
谷脇 功一 木屋 博昭
弓削 孝雄 藤本 徹
大江浩一郎

脛骨粗面裂離骨折は比較的稀な疾患であり、14~16歳の若年者に多く発生し、且つスポーツ中におこることが多い。今回我々は12歳男性と15歳女性の2例を経験した。

症例1は163cm65kgの12歳男性で、走り幅跳びの踏切の際に発生した。骨折は脛骨粗面より関節内へ至る大きな骨片を有しており、骨折面に軟骨が認められた。健側のx線にて、舌状突起が認められたが、Osgood - Schlatter 氏病には罹患していなかった。螺子によるZuggurtung法にて固定した。

症例2は15歳女性で、飛び降りの着地の際に発生した。骨折は脛骨粗面が薄く剥離されており、骨片は数個に粉碎していた。Kirschner鋼線によるZuggurtung法を施行し、早期訓練により経過は良好である。

本疾患は成長障害が問題であり、強固な固定を危惧する報告もあるが、早期訓練、早期抜去を念頭に入れて、治療方針を立てる考え方が多い様である。

6. Bipolar 型人工骨頭置換術後に生じた大腿骨骨折の治療経験

県立延岡病院整形外科

○木屋 博昭 永田 高見
谷脇 功一 弓削 孝雄
藤本 徹 松岡 知巳
大江浩一郎

人工骨頭置換術後の合併症の一つに同側の大腿骨骨折がある。今回我々は当科にて昭和62年より平成 5年 4月まで Bipolar型人工骨頭置換術を258股に施行した。その原疾患は大腿骨頸部内側骨折 142股、慢性関節リウマチ15股、変形性股関節症81股、大腿骨頭壊死20股であった。この内大腿骨骨折を術後に生じた 6症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

一般演題Ⅱ. (15:00~16:00) 座長 横山正昭

1. 考案した枕を頸椎疾患に使用した小経験

平部整形外科医院

○平部 久彬

頸部椎間板症や外傷性頸部症候群などの患者が、疼痛などのために睡眠が障害される、側臥位の維持が困難などと訴えるが、少人数ではあるが、考案した枕を使用してみたのでその結果を報告する。

2. 第3、4胸椎脱臼骨折後、脊髓損傷をまぬがれた一症例

宮崎医科大学整形外科

○渡邊 信二 鳥取部光司
福田 健二 平川 俊一
田島 直也

T3、T4の脱臼骨折を受傷したにも関わらず神経症状を呈さなかった症例を経験したので報告する。

【症例】 6歳男児、受傷機転は交通事故で、遊戯中バックしてきた車に胸部をひかれた。右4-9肋骨骨折、左鎖骨骨折、肺挫傷、頭蓋底骨折を合併し初期治療は当院ICUにて管理施行された。当科転科後、単純レントゲンにてT3の骨折およびT4の脱臼が確認された。断層撮影、CTにてT3の両側椎弓根部での骨折、T4の椎間関節の後方脱臼が認められたが、脊柱管の狭小化なく、MRIにてても脊髓の圧迫所見はなかった。受傷後3週目に Halo - pelvic distraction 施行。受傷後8週目の断層撮影、CTにて脱臼の僅かな整復と仮骨形成を認めた。受傷後3ヶ月硬性コルセット装着し転院となった。麻痺出現がなかったのは椎弓根部で骨折があり、いわゆる Floating - arch を形成し脊柱管の狭小化が見られなかったためであると考えられる。

3. 当科における経皮的椎間板摘出術の検討

宮崎医科大学整形外科

○矢野 浩明
平川 俊一
久保紳一郎

田島 直也
福田 健二

【目的】経皮的椎間板摘出術（PN）は、保存的療法と手術療法の中間的療法として現在行なわれているが、その適応について未だ一定の見解は得られていない。今回我々は当科におけるPN施行例を調査し、その適応について検討した。

【方法】対象は当科において1990年11月～1993年3月までの間にPNが施行された9症例で、男性7例、女性2例、平均年齢は24.9（10～49）歳であった。これらについてヘルニア形態、ヘルニア高位、摘出椎間板量と手術成績の関連について検討した。

【結果】ヘルニア高位は、L4/L5-3例、L5/S1-6例であった。摘出椎間板量は0.6～3.3g、平均1.8gであった。手術成績については、術前・術後のJOA点数が50%以上改善を示したものが6例（66.6%）であった。再手術に至った2例では術中神経根の癒着が高度であることが確認された。ヘルニア形態、ヘルニア高位、摘出椎間板量と手術成績との関連は見られなかった。

4. RAにおける椎間板のMRI

宮崎医科大学整形外科

○吉田好志郎
桑原 茂

谷口 博信
田島 直也

【目的】慢性関節リウマチ（以下RA）では、頸椎病変を高率に発生し、治療に難渋することが多い。今回我々は特にRA下位頸椎不安定性の危険因子を明らかにする目的で、RA患者に頸椎MRIを施行し、その椎間板病変について検討した。

【方法】対象は当科外来受診中のRA患者20例で、全例女性、平均年齢50.3歳、平均罹病期間10.4年で、stage分類ではⅢ～Ⅳであった。これらに対して頸椎MRIを施行し椎間板変形、椎間板前方突出、後方突出、椎体内突出について調べた。なお変形性頸椎症10例、頸椎椎間板ヘルニア10例についても同様の検査を行ない比較検討した。

【結果】RAでは全例に椎間板変性がみられ、前方または後方突出が高率にみられた。頸椎椎間板ヘルニアはほとんど単椎間板病変であったのに対しRAの椎間板突出は多椎間に及んでいるものが多かった。しかもこの中にはガドリニウムにてエンハンスされるものがあり、RA性肉芽病変の関与が考えられた。

5. DXAを用いたRAの骨粗鬆症の検討

宮崎医科大学整形外科

○渡部 正一 田島 直也
桑原 茂 黒木 俊政
帖佐 悦男 谷口 博信

【目的】DXA (Dual energy X-ray absorptiometry) を用いて、RA女性患者の骨塩定量を行い、RA患者に生ずる全身性骨粗鬆症の背景因子について検討した。

【方法】RA女性患者35例 (24~80歳:平均57.3歳) に対し、DXAを用いて腰椎正面を中心とした骨塩定量を行い、BMD (Bone mineral density) 及び人種・性・年齢・体重・身長を考慮した正常 BMD値からの% (% Age Matched) により、年齢・罹病期間・ADL・RA炎症活動性などとの相関を求めた。また、ステロイドの影響および脊椎圧迫骨折についても検討した。

【結果】腰椎正面 BMDは年齢と、また腰椎正面% Age Matchedは罹病期間 ADLとの有意な相関を認めたが、炎症活動性とは相関を認めなかった。脊椎圧迫骨折群は非骨折群に対して有意に低い BMDを呈した。

【結語】RAに生じる全身性骨粗鬆症に関連する因子として加齢・不動性等が考えられた。

6. 破壊性脊椎関節症のX線所見

永吉整形外科医院

○岩切 清文 永吉 洋次

DASは長期血液透析患者に認められる特有の脊椎病変として注目されている。Kuntz (1984) は、そのX線像の特徴として、椎間腔の著しい狭小化、隣接する椎体終板の erosions and geodesを認めるが、明らかな骨棘を形成しないという所見をあげている。

私共はHD患者で各種の愁訴で受診した者の中に脊椎の病変を認めたが、それらの中に必ずしも Kuntzの条件に該当しないものがあり、しかもそれらは従来一般の患者に見られた脊椎病変とも相違していた。

異常所見の部位は頸椎10、腰椎2の12症例であり、頸椎歯突起部2、頸椎5、6、7部7例で、大部分は椎体、椎間板の異常であるが、脊椎後部の病変と思われる症例が数例認められた。

これらの脊椎病変のX線像を呈示する。

— 休 憩 —

特別講演 (16:00~17:00) 座長 田島直也

『変形性股関節症の治療』

N T T九州病院整形外科

伊勢紘平 部長

開 会